

巻頭言



「温故知新」に学ぶ

会長 宮下昌宏

群馬県中学校長会は、平成19年度本部役員等・会員（175校）中学校長の皆様とともに「県内中学校長間の緊密な連絡提携を図り、中学校教育の振興に寄与する」本会の目的達成に向け、活動方針並びに活動の重点に基づいた校長会活動の推進に向けて、家庭・学校・地域社会も「教育者同士」という立場にたつて、この一年間、役員、理事の皆様、各々専門部員の皆様、現場からの生のご意見をいただいた各校長先生方に感謝申し上げます。

一年間という歳月はとても短かったのではないかとも思います。答えを求め海を渡って入宋した道元禅師は、「光陰を惜しむべし、歲月人を待たず」と説いています。これは、室町時代から江戸時代初期の頃、禅僧が書いた詩文集の中にも出てくることことばであります。私たちは、このことばを忘れないで、自分や他人にも甘えず、待ってくれぬ時間を大切にして、日々の学校経営に取り組んでいかねばならないと思います。

1947年（昭和22年）新学制によって「新制中学校」が創設されスタートして以来、諸先輩方のご努力により十年ごとにその足跡を記録として残されてきています。今年で、学校創設60周年の記念すべき節目の年に、市川編集委員長はじめ、委員の皆様が3年間に渡るご尽力により、県中学校長会60年記念誌「中学校60年のあゆみ」を発刊できたことは誠に意義深いことでもあります。

わが国では、昔から「竹」を縁起の良い植物として尊重されています。私もこの「竹」が好きでわが家の庭にもこの植物を植えて、大切に眺めております。そこで「竹」の素晴らしさ、持ち味について述べてみたいと思います。「竹は、上下に節あり」竹は上に真っ直ぐに伸びていきます。それは、竹には強い節がたくさんあり、その節が支えあって、竹を強く育て曲がることなく真っ直ぐに上へと伸びていくのです。この強い節こそ竹の命の源であります。雪に覆われた竹は、雪の重さによって押し潰されそうになり、地面すれすれまで頭を下げ、やがて跳ね返してもとの姿に戻します。私たちもどんなに辛いことがあってもじっと耐え、それに打ち克っていくことが必要ではないかと思います。この竹の良さや素晴らしさに学びたいと思います。「温故知新」といわれますが、過去を振り返ったとき、節目の60周年を迎えた中学校の歴史は、まさに波乱万丈であり、幾多の変遷を経て充実・発展をしてきました。また、多くの教育関係者の実践と苦闘の足跡でもあり、これからの校長会活動のあり方を教示してくれているように思われてなりません。

来年度から校長会は「新しい10年の節目」のスタートをきります。知識基盤社会の到来に向け、全日中や関東区中校長会とも連携を図り「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備えた子どもたちを育てる」役割を担い、責任を負うこととなります。校長のリーダーシップのもと、実を結べるよう努める教職員の果たすべき役割は、内なる啓発の火花が点火するのを支援し、やる気を起こさせることが大切ではないかと思います。教育を支える教職員こそ終焉を迎える時にも感謝されます。学校の諸課題の解決に向けて、校長と教職員が互いに方向を変換し、軌道修正を積み重ねた努力をする「隔曆不融」の関係を一層深め、職員室が「教育の談笑の間」となることではないかと思います。